

伊勢物語を編む人前に書入にや追分の驛より此麓まで三里あり、又麓より嶺まで三里半なり。嶺に巖窟ありて、虚空藏の石佛を案す、絶頂の大坑より、常に煙立のぼる事は硫黃の氣あり、硫黃満る時は地火突發し、大石ほとばしり、砂石を降して麓をやく、其おと數百里に聞ゆ。此山今夏月の雪まれなれど、立春の後百餘ヶ日、霜五度雪の晨の如し、又中秋より露寒く、あるひは霜早く来て毛作を惱す。又此山に落葉松生ず、富士松の如し、又紫草生ず、佳品とす。麓の追分より輕井澤まで、土地別して高き所也寒氣甚つよし、五穀不毛の地といひつべし。

〔北國紀行〕山中をへて、いかほの出湯に移りぬ、雲をふむかと覺る所より、淺間嶺の雪いたゞき白くつもり初て、それより下は霞のうすく匂へるがごとし。

半ばよりにはふがうへの初雪をあさまの嶺の麓にぞみる

○淺間山ノ事ハ、又火山ノ條ニアリ、參看スベシ。

戸隱山

〔書言字考節用集一
東遊記後篇四
トガクシヤマ
戸隱山
乾坤戸隱山
内郡水

〔東遊記後篇四
トガクシヤマ
戸隱山

戸がくし山は、信濃國の北の方によりて、越後へ出る方によりて、信州は總體山國にて、連山波濤のごとくなるに、此戸隱山は基を別にして、京近邊にていはゞ、生駒山を望むがごとくなる山なり、手力雄命を祭れりといふ。

○戸隱山ノ事ハ、神祇部戸隱神社篇ニモアリ、參看スベシ。

〔木曾名所圖會三
駒嶽木曾東嶺なり、其高數千仞、數峯連續して、其一峰に石あり、形は馬のごとしといふ。

〔翁草百六十
信州駒ガ嶽

富士禪定の人の云るは、絶頂より近國の諸山を見渡すに、箱根檜澤、信州胞衣嶽、御岳、飛驒、越後、上州邊高岳有といへども、其山と指て云べきは見えず、只眼下に一面の土堤を築きたる如し、但乾

駒嶽